

「3つの悪魔の策略」

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13

November.23.2025

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13 (パウロ)

Preface

先週まで同じ聖書箇所から、悪魔の最大の策略は、「人にとっての敵は、人だ」と思わせることであり、「私たちの敵は人ではなく、悪魔である」ということについて考えて参りました。

今朝は引き続き、3つの悪魔の策略について考えていきたいと思っております。

Part One

まず一つ目です。

悪魔が、唯一まことの神を信じるキリスト者を妨害し、またキリスト者のみならず、まだ神を信じておられない方々がイエス・キリストを信じ、神の子として、神の子らしく生きようとするのを妨害する最も代表的な方法が、「人の考えを攻撃することだ」と、聖書は教えて下さいます。

第二コリントを見てみましょう。

コリント人への手紙第二 4 : 1 - 4 (パウロ)

何を暗くすると言っているのでしょうか？

滅びゆく人々、つまり、まだ神を信じておられない方々の「思い」を暗くすると言います。

この「思い」とは、言語の意味から考えますと、「知性」ということになります。

「こんな素晴らしい文明社会を作り上げた」と自画自賛しているだろう私たち人間の知性を、悪魔は暗くしている攻撃していると言うのです。

これをエペソ書 2 章ではこのように表現しています。

エペソ人への手紙 2 : 1 - 3 (パウロ)

人間すべてが生まれて来る時、どのような思いとどのような流れの中に生まれて来るのかと言いますと、生まれて来るのにすでに罪の中に死んでいる者であり、肉と心の望むままに行わせようとする空中の権威を持つ偽の神、この世の神、悪魔悪霊の影響にどっぷり漬かった状態で生まれて来ると言うのです。

そして、その流れこそが、神への不従順であり、神への不信だと言います。

先週まで 3 回に渡って確認して来ましたが、私たちが私たちを決定づけて

いるのではなく、私たちではない、確かに存在する悪魔という第三の勢力がいるということです。

キリストを信じるキリスト者であっても、以前は、この悪魔の勢力に属していた者たちでしたが、今は、そこから、イエス・キリストの十字架の贖いゆえに救い出されたということを知れる者となりました。

この悪なる存在が、まだ神を信じておられない人々の考えや知性に覆いを掛けて暗くし、イエス・キリストの栄光の光が彼らの中で輝かないように妨害しているだけでなく、救いを受けたキリスト者たちにさえも、その栄光を生きられないように邪魔し、出来ることならば今一度、滅びゆく神への不信というこの世の流れに従わせ、滅びゆく人々に引き戻そうと、その攻撃の手を緩めることがあります。

例えば、使徒パウロ先生が書いた他の手紙を見ますと、「デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました」とか、「アジアにいる人たちはみな、私から離れて行きました。彼らは、ヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らっており、知性の腐った、信仰の失格者です」と、実際に、この地上のことだけを考えるように誘われ、欲望を神とする偽りの栄光に刺激と救いを求めながら、今一度、滅びへと吸い寄せられて行ってしまった人たちが居たことが分かります。

サタン悪魔は、私たち人間の考えや思いや知性を攻撃してきます。

世は、神を信じることを、知性と言われるものとは方向性が逆だと唱え、教え、そう思わせようとし、そう思わされています。

実際に、イエス様を信じてクリスチャンになったことを周りの人に明かしますと、「ああ、ああ、かわいそうに。こんな知的な人も、結局、宗教にハマっちゃうんだね」なんていう反応をされることがあります。

私も以前、顔の前で十字を切りながら、「アーメン、ソーメン、冷ソーメン」と、からかい半分にお辞儀をされたことがありました。

世から見れば、神を信じるようになった、イエス様を知ったということが、知性をあきらめて残念なところに陥ってしまったということになるのかもしれませんが。

でもイエス様は、その逆を言いますし、人類史上最大の知恵者だったと言われるソロモンもイエス様と同じように言います。

「心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛せよ」とイエス様仰り、ソロモンは、「主を恐れることは、知識・知恵の初めであり、愚か者は、この知恵と知識を蔑む」と言いました。

この世の流れや物質主義に生きることが人生の喜びだと思わされている人々からすれば、神を信じていないことが自慢であり、誇りになるでしょう。

また、度胸であり、肝っ玉が座っている証しになるのかもしれませんが。

「サタンに魂を奪われていることだ」とも気付かずにです。

どこまでサタンに魂を奪われているかと言いますと、福音書や使徒の働きに記録されていますが、至って正当で、善で、義で、聖なる33年の公生涯を生きたイエス様に対しても歯ごしりしながら反対し、攻撃をしました。

使徒パウロ先生に至っては、「パウロを殺すまで、食べ物を一切口にしない」なんていう一死覚悟の群衆もいたほどです。

尋常ではありません。

何者かにその知性を、考えを驚愕にされ、支配されていたとしか言いようのないような姿だと思えてしまいます。

彼らは、自分たちにこそ知恵があり、自由人であり、勇気があると思い、私たちまことの神を信じる者たちはその真逆と見られます。

おかしなものに心奪われた奴隷のようであり、何かに寄りかからなければ生きていけない怖がりの軟弱者であり、知性を諦めた無知な人だと見なされます。

でもこれこそが、人の考えや知性に覆いを掛け、暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を輝かせないようにしている悪魔の策略です。

創世記3章を見ますと、蛇に隠れた悪魔がどう人を言葉巧みにだましたのか、どう「神は公平ではない」という疑いを人のうちに呼び起させたのかが記録されています。

悪魔は人に、「あなたがた人間にとって良いと思われることを、神一人で楽しんでる」という考えを呼び起こさせます。

すると、最初の人エバは、「食べてはならない。その木から食べた時、あなたは必ず死ぬ」と神の愛の警告はどこかに飛んでいってしまい、改めてその木を見てみると、「こんな良い物を神様独り占めするなんてズルい。目にも慕わしく美味しそうだし、賢くなるようにも思えるし、こんな良い物を『食べちゃダメ』なんて、神様なんかやっぱ不公平だなあ」と、まんまと悪魔の策略に騙されてしまいました。

これこそ、悪魔の常套手段です。

疑わせることこそ、悪魔のお決まりのやり口です。

「神というお方は果たして、私の歩みの一步を一步を守り導いて下さっているのだろうか？ あの人の方がよっぽど良い人生送れているように見えるし、なんで私にはこんな不幸をあてがうのだろうか？ えこひいきしているのだろうか？」という疑いを呼び起こし、最終的に、「神は不公平だ」というところに至らしめます。

でも、聖書は言います。

「罪を犯した人間がエデンの園を追放されからの人生は、皆等しく辛く、苦しく、痛いことだ」とです。

また同時に、「神はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも

正しくない者にも雨を降らせてくださるお方です」とも言います。

つまり、お金のある人には、お金があるなりの痛みや苦しみや辛さや不安があり、お金の無い人には、お金がないなりの辛さや痛みや苦しみや不安がある。

権力のある人にはある人なりの、ない人にはない人なりの、健康のある人には健康のある人なりの、ない人にはない人なりの、親のいる人にはいる人なりの、いない人にはいない人なりの、車を持っている人には持っている人なりの、持っていない人には持っていない人なりの苦難があるということです。

なのに、サタンはあたかも、「そうではない」と不公平な思いを抱かせ、嫉妬を抱かせ、争わせ、自慢させ、プライドを傷つかせ、互いに見下ろさせ、結果、神の存在を否定させます。

尊敬するある牧師先生が、「物質はその状態が変化しても、総質量が保存される」という「質量保存の法則」に準えて、「苦難総量一定の法則」と仰ったことがありました。

「体重を計る時、服を着て計るのと、服を脱いで手にもって計るのでは、見た目は違えど、体重計の針は同じところを指すように、人の人生における苦難のかたちは人それぞれ違えど、すべての人にとって、その人が感じる経験する苦難の総量は皆同じだ」と、「これこそが聖書の教える、世を生きる私たち人の姿であり、神の公平さを表す指針でもあるでしょう」と仰っていました。

「ああ、なるほどな。その通りだな」と思います。

悪魔は、私たちの考えを、神から遠ざけようと攻撃してきます。

Part Two

二つ目の悪魔の策略は、「恐怖心」を抱かせることです。

主なる神様を信じると、犠牲と不利益、それまで出来たことが出来なくなるという恐怖心です。

私自身も、神を信じる前や信じた直後にも抱いていた思いですが、「神様イエス様を信じるようになるとあれもやっちゃいけないだろうし、これもしちゃいけないだろうし、少しでも間違えると大きな罰を受けるんじゃないか、雷に打たれるんじゃないか、病気にかかっちゃうんじゃないか」というような恐怖心です。

A.D. 313年にキリスト教をローマ帝国の国教、国の宗教に認定したコンスタンティヌス大帝は、洗礼を死ぬ直前に受けたそうです。

その理由が、「洗礼を受けると、それまで楽しんできた罪な行いを再び行ってしまった時、神様が到底赦して下さるとは思えない」と、死ぬ間際に洗礼を受けたということです。

こんな不幸なことがあるでしょうか。

一日も早くイエス様を信じて、罪と死の恐れから解放され、天の御国の平安を抱きながら満ち足りる心を持って、来たる世における相続に胸馳せ生きることの出来る、人として得られる最大の特権を味わうことなく、この地上での生

を過ごしてしまいました。

先ほどのソロモンが、伝道者の書でこんなことも言いました。

伝道者の書 12：1－3、13（パワポ）

「死ぬ5分前に神を信じられたら、それこそ大往生だ」と思われている人たちは少なくないのかもしれませんが。

神を、イエス様を信じているクリスチャンでさえも、このような思いが脳裏をよぎってしまうことはないでしょうか？

「神様はどんなことがあっても私の見方でいて下さり、私を愛して下さい」ということよりも、「世の中を肉と心の望むままに生きる方がはるかに楽しく、イエス様信じて、聖く正しく生きられないと、神様は放っておかない」というような恐怖心です。

例えば、我が家の子どもたちのうちの一人が幼い頃に、外で遊んでいて思わずお漏らしをして帰って来たとします。

戸をバンと開けて帰って来て、お漏らしをしてズボンがびちゃびちゃになっているので、「なんでトイレに行かなかったの？」とちょっと叱ろうとすると、逆に、「ママ、ママが早く戸を開けてくれなかったから漏らしちゃったじゃないの！ 着替えるから、早く新しいパンツとズボン持ってきて！」とプンプンしながら言ってきたら、親はどうするのでしょうか？

ニヤッと笑いながら、その子に負けます。

これが、神様と私たちの関係です。

神の子とされた者が罪を犯しても、神の子であるという事実が消えて無くなることは決してありません。

たとえ間違いを犯したとしても、神の前に再び、厚かましいほどに図太く帰って行けばいいだけのことです。

「どんなことがあっても、神様は私の味方でいて下さり、罰を与えるために、死なせるために私たちを神の子として下さったのではない」という最も根本的なことを手放してはいけません。

親として子を育てる時、一番子供にやってほしくないことは、家に帰って来ないことだと思います。

どんなことがあっても、たとえどんな間違いを犯したとしても、とりあえず家には帰って来てほしいのが、親心です。

だから、聖書の神を父なる神と呼び、神様はご自身のことを、子を愛する母に例えなさるんだと思います。

サタン悪魔は、私たちに、父なる神のところに帰ることに恐怖を覚えさせ、帰らせないように導き、帰ろうとするのを妨害します。

だから、なんとしてでも、神のところに帰りましょう。
神様は私たちに、「帰りなさい」と語り続けて下さっています。

Part Three

三つめの悪魔の策略は、「落胆」させることです。

落胆と高慢は、コインの表裏、手の平と手の甲みたいなものです。

高慢になることと、失望や挫折することとは、全然違う様子ではあり、真逆のように見えますが、同じ原理・原因から生じるように思います。

両方ともに、自分に頼り、自分に信頼し、自分を見るから生じます。

キリスト教信仰は、私という人がどれだけ行を積むかという修行でもなく、どれだけ自分を高めるかの戦いでもありません。

キリスト教信仰は、信じる側の状態や心持ちを見ることではなく、信じている対象がキリストであるということが最重要ポイントです。

キリスト教信仰は、私という人ではなく、イエス・キリストを信じる戦いです。

私の信仰がどれだけ熱いのか、どれだけ素晴らしいのかと自分に根拠を置くのがキリスト教信仰ではなく、イエス・キリストをどれだけ信頼しているのか、どれだけイエス様を見ているのかの戦いです。

私たちがどんなに悪くても、どんなに罪深くても、どんなに足りなくとも、どんなに闇だらけであったとしても、なお希望があり、今この神の祝福の場にいるのは、私たちという人を根拠にしているからではなく、救い主イエス・キリストを根拠としているからですね。

私たちの信仰は、「信じることが大事」なのではなく、「イエス・キリストを信じていること」がすべてであり、救いであり、要ですね。

なのに、私たちはややもすると、イエス・キリストを見る、イエス・キリストを信頼する、イエス・キリストを信じるという戦いではなく、私がどれだけ信じているのかという戦いをしてしまいます。

心も燃やされる時には、信仰に厚いと思える時には、心がなんだか晴れやかで、自分の中の信じる気持ちが萎えると、落胆します。

悪魔は、イエス様を見る戦いではなく、私という人を見せ、私という人を思わせ、私という人を見つめさせながら、自分を信じる戦いへと誘い、落胆へと導いて行きます。

世の中、「自分を信じましょう」なんていうそれらしい言葉に溢れているのも、結局人を落胆へと陥れるサタンの作っているこの世の流れなのでしょう。

イエス様は、昨日も今日も明日も明後日も永遠に変わらない、愛なる神です。

私が意気揚々となるとイエス様も意気揚々となり、私が意気消沈するとイエス様も意気消沈されるようなことは全くありません。

それなのに、私たちは、そのように生きてしまっていないでしょうか。

落胆と高慢の両方共が、私という人を根拠にしているもので、調子に乗ると高慢になり、自信がなくなると落胆します。

イエス様を見るならば、落胆も出来ず、高慢にもなれません。

たとえ落胆しても、再び力がみなぎり、たとえ高慢になったとしても、再び遜るところへと、自ら喜んで感謝しながら選び取って行くことでしょう。

キリスト者には自慢も無ければ、落胆ありません。

あるのは、神の恵みだけです。

Conclusion

サタン悪魔の3つの策略について考えてきましたが、結局のところ、そのすべてが、私たちをもってして、私たちだけで悪魔と、または悪魔の作った流れの中で戦わせようと煽ってくることです。

イエス様が荒野で40日間何も食わずにそのお働きを準備しておられた時、悪魔がイエス様のところに来て、「おなか減ってるだろ？ お前が神の子ならば、その目の前にある石ころをパンに変えてみて食べてみ！」と誘惑したことがありましたが、そんな悪魔の誘惑に、イエス様はどう対処されたか？

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と仰いました。

これが何の戦いなのか、お分かりになるでしょうか？

悪魔はイエス様に、「あなたの実力で、あなた自身を証明してみなさい」と迫ってきましたが、イエス様はそんな悪魔の迫りに、「わたしはわたしを根拠にして、わたし一人で独立して存在しているのではなく、わたしをお送りになったお方を根拠にして、このお方の命令によってのみ存在しようとする者である」と返されます。

即ち、「唯一まことの神に根拠を置き、その方との関係の中で生きていくことが人にとってのすべてである」とお示し下さったということです。

私たちの戦いは、私という人をどれだけ推し立てていくのかの戦いではなく、どれだけ神の御前に帰り、イエス様を見上げ、聖霊なる神様の声に信頼するかの戦いなんだと思います。

私たちの日常生活の些細なことから重要なことに至るまで、そのすべての領域においてサタンは、「イエス様とか、神様とか、聖霊様じゃなくて、あなた自身のその力で戦ってみ」と迫ってきますが、私たちが取るべき姿勢・信仰は、「私と戦いたいならば、私が信じ、信頼している三位一体なる神様のところに行ってまず聞いてみなさい。私は父に帰り、イエスを見、聖霊の声に従うから」と返すことです。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ6：11